

鐵道局

明治廿三年三月十七日

内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

碓氷峠ヲ開鑿シ横川輕井澤西驛間鐵道連  
絡ノ儀御裁可ニ付テハ左ノ通鐵道局長官ニ訓  
令相成可然ト思考ス

鐵道局長官ニ訓令案

碓氷峠ヲ開鑿シ横川輕井澤西驛間ノ鐵道  
ヲ連絡スル為メ工費貳百萬圓トシ二十三年度

ニ於テ五拾萬圓ヲ支出シ残額百五拾萬圓ハ  
二十四年度以降年割支出スルコトニ決定シ  
付該工事設計書並ニ豫算書<sup>至急</sup>差出スヘシ  
明治廿三年三月十九日 總理大臣

大蔵省并會計検査院ニ通牒

勅諭

可也

可也

可也

可也

内閣書記官

大日本帝國政府

外務省

東京

三月二十三日

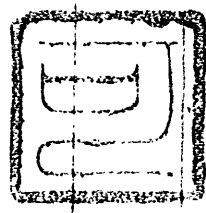
閣下

萬圓ハ

決定ニ

正スシ

臣



碓氷峠ヲ開鑿シ横川輕井澤兩  
驛間鐵道連絡ノ件

右謹テ裁可ヲ仰フ

明治二十三年三月

内閣總理大臣伯爵山縣有朋

高野六七

明治廿三年三月十四日

内閣總理大臣 大

内閣書記官長

外務大臣 大藏大臣

海軍大臣

文部大臣

逓信大臣

内務大臣 農商務大臣

司法大臣

衆議院議長

大木 重吉

市岡

碓氷峠の開鑿に横川輕井澤兩驛間  
鉄道連絡ノ件

右別紙議案ノ通議決セラル可キヤ茲ニ

閣議ニ倂ス

別紙鐵道局長官稟議鐵道資本  
増額鐵道延長ノ儀ヲ審査スルニ其  
要旨ハ明治廿年度ニ於ケル鐵道純  
益ノ額ハ大略金卅百餘萬圓ニ上リ之  
ヲ豫算額ノ金百四拾三萬餘圓ニ比  
較スレハ超過額金六七拾萬圓ニ達  
スルヲ以テ此ノ超過額ヲ二十年度ニ  
於テ鐵道増設費ニ充テ碓氷峠ノ開  
鑿事業ニ著手スルコトノ裁可ヲ請フ

ニ在リ因テ安スルニ官設鐵道ノ業タル  
直接ノ収利ノミヲ以テ目的トセス主トシ  
テ全國物貨運輸ノ便益ヲ謀リ平時  
ニ在テハ農工商業ノ繁榮ヲ資テ戰  
時ニ在テハ軍隊ノ運轉ヲ迅速ニシ軍  
機ヲ失セシメサル等ノ為メ專ラ緊要  
ノ場所ヲ選定シ經營ス一キモノタルハ  
論ヲ待タス然ルニ高崎線ト直江津泉  
トノ聯絡ヲ取リ更ニ東進シテ新潟  
達スル延線ノ如キハ官設鐵道事業

中ノ最モ緊要ナルモノニシテ決シテ之  
ヲ等閑ニ附ス一キモノニアラス就中横川  
輕井澤兩驛ハ兩線相近ツキ汽笛  
相應スルノ今日ニ至リ僅ニ中間一障  
壁ヲ存スルカ為メ千尺ノ功一簣ヲ缺ク  
ノ憾アリ宜シク速カニ之ヲ開鑿シテ武  
毛信越ノ四大國ヲ貫通シ南北兩海  
ノ線路ヲ連絡シ運輸ノ便ヲ全カラシ  
ムヘシ且ツ目下鐵道局ノ事業モ從來  
計畫セシモノハ總テ後功セシヲ以テ多



年募集訓練セシ技術者ハ大半解  
任セサルヲ得ル而シテ一タニ之ヲ解任スル  
中ハ他日延線工費支辨ノ途ヲ得ルニ  
至リ再ヒ前日ノ如ク之ヲ集ムルハ極メテ  
困難ニシテ前後冗費ヲ生シ政府ノ損  
耗頗ル少カラサルヘシ故ニ稟申ノ如  
ク二十三年度ニ於テ二十二年  
度鐵道  
純益金豫算超過額ヨリ五拾萬  
圓ヲ支出シ先ツ以碓氷峠開通ノ事  
業ニ著手セシメ而シテ横川輕井澤兩



驛間連絡迄ノ工事費用總額貳百萬圓ト見  
積リ繼續費トシ内五拾萬圓ヲ二十三年度ニ於テ支出  
シ残額百五十萬圓ヲ二十四年度以降年割支出スルコト  
ニ定メラレ然ルヘシ或ハ本年議會ノ  
開設ヲ待テ其積費ヲ経徐ニ著手  
スルモ遲カラサルカ如シト雖モ既ニ數千  
萬圓ノ官設鐵道工事ヲ該切シテ獨リ  
碓氷峠一障壁ノ為メ一切一筆ヲ缺  
クハ國ノ經濟上頗ル不得策ニシテ百  
年ノ大計ヲ等閑ニ附スルノ謂ヲ免カ  
レズ況ンヤ前陳ノ如キ重要ナル諸



種ノ理由アルニ於テヤ

又直江津ヨリ延ヒテ新潟ニ至ル線  
路モ到底之ヲ設計セサレハ官設鐵  
道ノ事業全カラスト雖モ已ニ前線ノ  
工事ニ著手スルニ於テハ必シモ同時ニ  
起工スルニ及ハス豫メ計畫ヲ為シ其豫  
算ヲ定メ本年議會開設ノ期ヲ待  
テ其協賛ヲ請求スルニ決定セウ  
レ然ルニシ

本件ハ目下會計年度末ニ際シ頗

ル緊急ヲ要スル件ニツキ速ニ決定  
ノ上廿三年豫算ニ追加相成可然ト  
認ム

註  
著  
年



アルニ於テサ  
井コト延ヒテ新鴻ニ至ル線  
底之ヲ設計セサルニ官設鐵  
業金カラスト雖モ已ニ前線  
者手スルニ於テハ必シモ同者ニ  
及ハス豫メ計画ヲ為シ其  
メ本年議會開設ノ期ヲ待  
續テ請求スルニ決定セウ

該事業ニ於テ官設  
業金カラスト雖モ已ニ前線  
者手スルニ於テハ必シモ同者ニ  
及ハス豫メ計画ヲ為シ其  
メ本年議會開設ノ期ヲ待  
續テ請求スルニ決定セウ

官設鐵道資本増額線路擴張ノ儀ニ付  
頃日意見ヲ具シ稟請致置候處右  
ハ目下緊急ノ件ニ付幸ニ急速ノ御裁  
可ヲ得廿三年度中ニ於テ施行ノ運  
ニ相成候ハ、無此上儀ニ候得共万一  
御詮議ニ時日ヲ要スル儀ニ候ハ、先  
以テ碓氷峠ノ開鑿事業ノミニテ著手  
致度存候其故ハ前ノ稟議ニ竭セシ  
如ク横川輕井沢兩駅ヲ聯絡セサレ  
ハ特リ鐵道ノ利用功ヲ一簣ニ虧ク  
ノミナラス高寄横川間輕井沢直  
江津間兩線運輸營業上及其業

務管理上ニ於テ常ニ不便ヲ感シ且  
厩舎ヲ各自ニ設ケ人負ヲ配置スル  
等煩ル凡賞ヲルヲ不免バ一日モ速  
ニ布設著手致度事ニ有之且其工  
事タルヤ里程ハ僅ニ十五六哩ナリ  
隧道ノ數四十七所ニシテ其延長概  
計五哩ニ及ビ其他崖谷鏝填ノ土功  
モ亦容易ノ業ナラス故ニ數年ニ互  
ラナシハ竣功ヲ視難キモノニ付一日モ  
速ニ著手致度存候事ニ有之且又此  
工事著手相成ニ於テハ技負及器械  
共用廢地ヲ轉スルノ利便有之ハ  
官設鐵道ニ取テハ實ニ緊急事件ハ

存候就テハ右經費ニ充ルノ出處ヲ苦  
慮候所目下本局所管鐵道運輸ノ  
實況ヲ視ルニ廿二年度純益ノ額  
ハ大畧金貳百餘万円ニ上ルヘシ之ヲ  
豫算額金百四拾三萬餘円ニ比較  
スルハ其超過額金六七拾万円ニ達  
スヘシ依テ差向キ此超過額ヨリ少十  
クモ金五拾万円ヲ廿三年度ニ於テ確  
氷峠ノ建設資中ニ充用ノ儀仰裁可ヲ  
得起工スルニ於テハ大體増額ノ御詮議  
ハ逐テ裁定セララル、モ其間前書緊急  
事業ハ既ニ緒ニ就クヲ得レハ當局  
實業上支障ナキヲ得ヘクト存候ニ付

何卒速ニ右臨機、御處断有之様  
懇請、至ニ不堪候此段更ニ及稟  
請候也

明治廿三年三月十一日

鐵道局長官子爵井上勝

内閣總理大臣伯爵山縣有朋殿

# 會計法

第三十二條 敷年シ期シテ後切スヘキ工事制  
造及具、他ノ事業ミシテ繼續費トシテ總額  
シ定シタルモノハ毎年度ノ仕掛残額シ後切年  
度マテ逐次繰越使用スルコトヲ得

富田法第三十七條 該當スル歳出ノ件單

案中

第七條 明治三十三年度前、豫算に於て既定  
の経費に對し、年割支出額ハ明治三十四年  
度後、豫算に於て當初確定、年限内仍  
お繼續ノ効力ヲ有ス

二十三年度豫算中、

歳入恒常部第三款

第十三項 鉄道基金 金貳百八萬三千圓

官設鉄道會計法案

第一條 鉄道事業ヲ經營スル為メ固定資

本据置運轉資本ヲ置キ營業上ノ收入及  
其附属雜收入ハ鉄道事業ノ費用ニ充  
ルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テレム

第二條 鉄道事業ノ為メ從來使用シ及將  
未増加スル所ノ土地軌道車輛停車場工  
場家屋機械其他重要ナル器具ハ其固定  
資本トシ從來ノ流動資本ハ其据置運  
轉資本トス

第四條 鉄道事業ノ純益及固定資本ニ

属る物件、賣拂代金、總之一般に歳入に  
歸入スル

内甲九〇番

明治廿三年九月十一日

内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

東京市高架鐵道線路工事計畫ノ件

向ニ下谷秋葉原鐵道布設ニ付府民ヨリ建議ノ際  
高架鐵道布設ノ儀閣議決定スルヲ以テ左案ノ通  
内務大臣ニ通牒相成然ルニ

通牒案



高梁鐵道ヲ以テ新橋上野兩停車場ヲ聯  
絡スル爲メ東京市中央ニ一大停車場ヲ  
設置シ該停車場ヲ以南新橋停車場ニ至ル  
間ノ線路ヲ官設トシ其以北秋葉原ヲ經テ上  
野停車場ニ至ル間ノ線路ヲ日本鐵道會社  
私設トシ又ハ同會社ニ於テ其負擔ニ堪ユル能  
ハサル場合ニ於テハ秋葉原ヲ以テ官私設ノ分  
界トシ右ニ事計畫ニ着手ノ義鐵道廳長  
官ニ訓示セラル可ク此段及通牒修也

明治三十二年九月二日



内閣總理大臣

内務大臣宛



|       |       |
|-------|-------|
| 内軍九〇  | 初年五   |
| 名軍二三  | 二六    |
| 流傳    | 自一九二六 |
| 自一九二六 | 自一九二六 |
| 自一九二六 | 自一九二六 |

內閣書記官

内閣書記官長

界。

海軍省

文部省

連日大風

中國書畫出版社

陸軍省

司馬太臣

豐茂務會

大木

鐵道局長官具申 日本鐵道會社上野

秋葉原間線路列車通過二程度<sup>4</sup>定ム件